甘い蜜の嫉妬(エンヴィー)

黄金　白銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
甘い蜜の嫉妬（エンヴィー）

【Ｎコード】
Ｎ０３８８Ｎ

【作者名】
黄金　白銀

【あらすじ】
山梨県に訪れたコナン達、木村農事研究所の温室で見つかった警備員の死体と近くの森で見つかった謎の変死体…こんな殺人事件ならコナン達にとっては日常的なものだ…だが、山梨で待ち受けていたのは殺人事件だけではなかった、地震を起こし、畑や農家を失わしてしまう…『巨大モグラ』が現れたのだ……この物語は『名探偵コナン』と『ウルトラＱ』で哀しい人間ドラマを描いた『第８話』を原作にした、お話です。

Ｆｉｌｅ．０『雷雨の中で』

ビカァァァァァァン！！

ゴロゴロゴロゴロォォ…

不気味な雷鳴…

暗い夜…

この雷雨の中で事件が起きたのです…

『木村（きむら）農事研究所』、この研究所にある一つの温室。そこに一人、誰かが近づいて行く。

パリィィィィン！

温室のガラスが割れた。その者は温室の中で何かをしている。

「誰かおるんですかい？」

この研究所の警備員である老人が温室を見に来た。その者は老人が来たのを予想外と思っているようだ。

ブンッ！

その者は何かを投げた。

ゴンッ！

「アゥッ！？」

物は老人の額に当たった。

クワァァァ…

ドガァ！！

その者は老人にスキができたのを見計らって、老人の頭をおもいっきり凶器で殴った。

ドサッ！

老人はその場で倒れた、頭からはすごい出欠だ。その者は老人を殴った後、その場から逃げて行った。

ブブブブブーン！

温室の中で虫の羽の音が聞こえる、雷雨の中かすかに聞こえる、虫の羽の音（ね）…

不気味な雷鳴とともに起きたこの殺人…

これが事件の始まりです…

これから…この小説を読むあなたの心は…

あなたの体を離れ…

この不思議な世界へと入って行くのです…

あの…『迷宮無しの名探偵』とともに……

File．1『山梨県』

山梨県

富士山が見える道路を一台の黄色い車が走っている。
「わぁ！富士山です！」
「すごーい！」
「日本一の山だぜ！」
この車に乗っているのはヒゲをはやした老人と子供が五人。その内の三人の子供が富士山を見た事でハシャいでいる。
「おい、おめぇら。」
子供の内の一人のメガネをかけた少年『江戸川コナン』が三人の子供『円谷光彦』『吉田歩美』『小嶋元太』に注意する。
「コナン君も見なよ！富士山、大きいよ！」
歩美がコナンをさそう。
「いいよ、俺は…」
コナンは窓の外を見る。

いつまでこんな事やってりゃいいんだ…

コナンはハァッとため息をつく。

コナンは実は『江戸川コナン』という名前ではない。彼の本名は『工藤新一』。

そう、俺の名は工藤新一。ある日、幼なじみの『毛利蘭』と遊園地に遊びに行った時、黒ずくめの男達の怪しげな取引現場を目撃した。その時、背後からやって来たもう一人の仲間に気づかなかった。その男達に薬を飲まされ目が覚めたら…体がちぢんでしまっていた！阿笠博士の助言通り、俺は姿を隠す事にし、蘭に名前を聞かれた時、とっさに『江戸川コナン』と名乗り、探偵事務所をやっている蘭の家に転がりこんだ、と言うワケだ…

「まぁ、たまには君もこれから行く所でのんびりとしたらどうじゃ？」

と和むのはコナンの正体を知り、コナンの手助けをする協力者である天才発明家の『阿笠博士』博士。様々なメカを作り、コナンの役に立っている。

「ずっと事件に関わってたんだから、たまには羽をのばして休むのもいいんじゃない？」

ともう一人、コナンに言ったのは茶髪でウェーブをかけた少女『灰原哀』。

彼女の本名は『宮野志保』。元はコナンを小さくさせた黒ずくめの男達の仲間で、組織を抜け出す際にコナンが飲まされたのと同じ薬を飲み、組織から脱出した。今は阿笠博士の元で暮らしている。

それで歩美、元太、光彦と仲良くなり、コナンと哀を加え、彼らは『少年探偵団』と自称している。

「ん？」
車が止まる。前には駅があり、その駅の人だかりで止まったのだ。
「これは通れねぇなぁ…」
「どうしたんですか？」
阿笠博士が車の窓から顔を出し、道行く人に聞く。
「何でも、電車が脱線して完全に止まっちまったんでさ…」
と話してくれた。
「電車が脱線ですか。」
「大変な事故だな…」
「地震のせいかな？」
光彦、元太、歩美はそう言い出す。
「かもしんね、ここんとこ地震が多くてな、畑や田んぼがメチャメチャになっちまっただ。」
とその人は悲しそうに答える。
「かわいそうに…」
歩美が同情する。
「わしら、この先にある『木村農事研究所』に行きたいんじゃが…うっかり道に迷ってしまってのう。」
阿笠博士は道を尋ねる、その横でコナンは…

道に迷ったのは博士が家に地図を忘れてきたからじゃねぇか…

と心の中でツッコむ。
「おぉ、せやったらそこに農事研究所の車が停まっとるから、それについて行ったらええ！」
と、指差した方向に農事研究所と書いているトラックが停まっていた。
「あぁ、ありがとうございます。」

阿笠博士は車を出し、トラックの後ろまで行く。
「あの～すみません。」
阿笠博士はトラックに乗っている人を呼ぶ、だが出てこない。

コンコン

「どうしました？」

トラックからではなく、横から窓を叩いて現れた。
「あぁそちらでしたか。」
「駅で飲み物を買っていたからトラックから離れていたんです。」
声をかけてきたのはメガネをかけた体の細い男だ。
「でも、おかしいなぁ。あいつ乗ってるハズなのにどうしたんだろ？」
男がトラックに行き、乗っている人の様子を見る。すると…

「いや、おまえ寝とんのかい！」

なんと乗っている人は寝ていたようだ。寝ているその人はちょっとポッチャリしているが、どこか愛らしいかわいらしさを持つ女性だった。
「すみません！こいつ寝てやがりまして！」
「あ、いえいえ…」
男は少し口が悪くなっている。
「で、何かご用ですか？」
男は聞く。
「あぁ、わしら木村農事研究所に行きたいんじゃ。すまないがついて行ってもかまわんか？」
「あ！もしかして阿笠様ですか？」
「えぇ、そうです。」

「所長から聞いております、今日お客として来られることを。」
男はポケットから名刺を取り出し阿笠博士にわたす。
「申し送れました、私、木村農事研究所で『宮藤(みやふじ)』の助手を務めております『木之本貴也(きのもたかや)』と申します。」
「これはご丁寧に…」
阿笠博士も名刺をわたす。
「では、さっそく行きましょうか。」
木之本が運転するトラックが走り出し、その後ろを阿笠博士が運転する車がついて行く。

ブゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥン！

車が走っている最中に少年探偵団と阿笠博士と木之本は見かけた…

電車の脱線事故現場を……

「これは…ただの脱線じゃねぇぞ…」
「すごい事になってる…」
「線路が…」

線路の下の地面が盛り上がって線路を崩してしまい、そのために電車が脱線してしまったのだ…

コナンはもう入ってしまったのです…

アンバランスゾーンに…

File．2『木村農事研究所』

山梨県　木村農事研究所

この研究所は農事に関するものの研究をしており、山の上にある、この研究所の食堂で暗い顔をした一人の男がいた。男の容姿は白衣を着ていてメガネをかけた痩せ型の男性だ。
「ハァァ…」
男はため息をつきながら食事をしている、これではご飯がまずくなる。
「宮藤（みやふじ）さん！」
突如、男こと『宮藤』に話しかけてきたのは一人の女性。女性の容姿は黒髪のショートカットに大人っぽい女性だ。
「ん？…あぁ、奥平（おくだいら）さんか…」
女性の名前は『奥平美月（みづき）』。男性の名前は『宮藤善孝（よしたか）』。
「奥平さん、じゃないですよ！いつまで落ちこんでるんですか！？」
「落ちこむさ、あんな『事』があったんだから…」
「あれが起きてから、もう一週間は経つんですよ！」
「いや、だけど『あれ』はまだ研究中の未知なる物だから…」
「見てください、この村を…」
奥平は食堂から見える地元の村を宮藤に眺めさせる。
「この通り、村は平和ですし、何の事件も起きていない、宮藤さんの考え過ぎですよ！」
奥平は怒鳴るように宮藤に訴えかける。
「…だといいんだけど…」
宮藤はまだ落ちこんでいる声を出している。

木村農事研究所前

コナン達は木之本の案内により、やっとのことで農事研究所に到着した。

「わぁ、ここが！」

「農事研究所！」

「野菜作ってる所だ！」

歩美、光彦、元太は車から降りてはしゃいでいる。

「おい、はしゃぐな。それにここは野菜作ってるんじゃなくて農業に関する事や畑などにいる生物を研究している所だ。」

と、はしゃぐのをおさえるコナン。

「けど、あなたも内心ははしゃいでるんじゃない？」

哀がコナンに問いかける。

「あの『発見』に…」

「るせぇ、おまえもだろ。『あれ』見たがってたって博士が言ってたぞ…」

「あら、博士ったらおしゃべりね…」

この小声の話し合いをしている最中、博士がくしゃみをした。

へっくしゅん！…

ブロロロロロロロロロ！

キキィ…

一台のタクシーが研究所前に停まった。

「あれ？コナン君？」

タクシーから降りてきたのは工藤新一の幼なじみ『毛利蘭』である。
それと蘭の親友『鈴木園子』と蘭の父親の『毛利小五郎』である。
「蘭姉ちゃん！」
コナンは蘭のもとに行く。
「どうしてここに？」
コナンは問いかける。
「俺のところに依頼が来たんだ。この研究所の裏山で死体って見つかって、それの調査を警察としてほしいと…」
と、小五郎が答える。こう依頼内容を軽々と子供に話すのはどうかと思うが。
「それであたし達はただの付き添い！農事研究所なんて、そう簡単に見学させてもらえないからね！」
続けて園子が答える。
「あ、毛利様ですか？」
小五郎に話しかけてきたのは、この研究所に勤めている研究員。
「はい、そうですが…」
小五郎は答える。
「お待ちしておりました、私、この研究所の研究員で『藤原ゆかり』と申します。」
ゆかりは長い茶髪でスレンダーな体型の女性だ。
「あと、阿笠博士ご一行様もだ！」
コナン達の後ろから木之本がやって来た。
「木之本さん、おかえりなさい。あら？」
ゆかりは気づいた、木之本が引っ張っている女性のことに。
「ん？あぁ、コイツ寝ちまいやがってなぁ。」
木之本が引っ張っているのは先ほど車の中で寝ていた女性だった。
立ってるが、まだ半分寝ているようだ。
「あらら、アキちゃん、寝ちゃったのね。」
ゆかりはクスクスと笑う。
「ほえ？ここどこ？」

アキちゃんと呼ばれた女性は寝ぼけながらしゃべる。
「木村農事研究所の前よ、アキちゃん♪」
子供に話しかけるように、ゆかりは言った。
「ふえ？」
アキはまだ寝ぼけている。
「ダメだ、こりゃ…」
木之本はハァッとため息をつき、ゆかりはまたクスクスと笑う。
「それでは木之本さん、毛利様を刑事さんが待つ来客室にご案内して。私は阿笠様ご一行様と毛利様の付き添いの方達を所長の所に案内するわ。」
「了解…さぁ毛利様こちらへ。」
木之本は小五郎を来客室へ案内する。
「さぁみなさま、ご案内します。」
ゆかりはコナン達を研究所の中を案内する。
「あ、その前に…」
ゆかりは受付に行きマイクを取る。

〔奥平さん、奥平美月さん！至急受付までお越しください！！〕

とアナウンスを言う。すると研究所の奥から先ほど食堂にいた奥平美月がやって来た。
「はい、何でしょうか？」
「美月ちゃん、お迎えありがとう♪」
「え？」
奥平は意味がわからなかった。だがゆかりがチョイチョイと指差すものを見てハッキリした。
「晶菜（あきな）！！」
奥平はアキちゃんこと晶菜に駆け寄る。
「ほえぇ？お姉ちゃん？」
晶菜はまだ寝ぼけている。どうやら奥平美月はこの晶菜の姉のよう

だ。
「すみません！妹がご迷惑をおかけして！」
姉はあやまる、コナン達は「いえいえ」と答える。
「申し遅れました、私はこの研究所の主任研究員、宮藤の助手をしております『奥平美月』と申します。こちらは私の妹の『奥平晶菜』です。」
と美月は晶菜を支えながら自己紹介をする。
「では、私はこれにて！」
と、言いそそくさと奥平姉妹は去って行った。
「ふぅ、これでよし！」
ゆかりは、やってやったぜ、と言っているような顔をしている。
「さぁこちらへどうぞ。」
ゆかりはコナン達を研究所内部へ案内する。

以外と性格悪そうだな、この女…

と心の中で思うコナン、そんなコナンに寄り添う哀。
「いいの？『死体』、気になるのでしょ？」
いじわるそうな顔をしてコナンに問いかける哀。
「『探偵』として…」
「気になるぜ、もちろん。だけど今は『あれ』が気になってしかたがない…」
と、答える名探偵コナン。

研究所内　来客室

来客室に案内された毛利小五郎。そこで待っていたのは一人の男。
「お待ちしてました、毛利さん。私は山梨県警の警部『梶田興治』

でございます。」
梶田警部は５１歳の中年男性で黒髪の間に白髪がある。
「こちらこそはじめまして、私が名探偵の毛利小五郎です。」
カッコつけて名乗る小五郎のおっちゃん。
「早速ですが、その死体とは？」
小五郎、尋ねると…
「これです。」
と、梶田は一枚の写真を取り出し小五郎に見せる。
「どれ……う！…」
小五郎の顔がひきつった。
「死体を見慣れているあなたや我ら警察でも、この死体はさすがにそういう顔になるでしょう…」
梶田も顔がひきつってる。
「…これは……」

写真に写っている死体は…
頭だけで血みどろ、グチャグチャになっている…

「他の身体の部分も発見されましたが…どれも同じ状態でした…」
頭以外の身体の部分はすべて山中の至る所にバラバラに散らばっていた。
「これは…ひどい……」
「我々警察はこれを殺人と見て捜査をしているのですが、実は事故なのではないのかと見られるのです…」
「事故？」
小五郎は聞くと梶田は答える。

「この死体は……熊か何かの動物に襲われたのではないか、という事です…」

小五郎に緊張が走る。

File．3『ハニーゼリオン』

コナン達はゆかりに研究所内を案内されている。
「ここが研究室、ここでは農事に関する事柄を研究しております。」
ゆかりは丁寧に説明する。
「そして、ここは図書室、ここには植物、昆虫、動物などの一般向けの資料などが置かれています。」
そして、ゆかりは続いて図書室に続き、野菜の保管所、昆虫標本の展示場、なぜか動物の絵や木像や剥製(はくせい)が置かれている部屋もあった。

「ねぇねぇ、『温室』は見せてくれないの？」
園子がたずねると…
「あ……今は見せれないのです…」
と、ゆかりはおびえたような声で答える。
「え！？」
「どうして？」
コナン達が聞いても、ゆかりは答えなかった。
「すみません、今は見せれないし、答えれないのです…」
としか言わないゆかり。

ゆかりはコナン達をこの研究所の所長のもとに案内した。
「所長、阿笠様ご一行様を連れて来ました。」
ゆかりは所長に報告する。
「あぁ、ご苦労様。」
ここ、木村農事研究所の所長『木村重夫(しげお)』が客人を出向く仕度をする。

「阿笠君、久しぶりだ！」
木村博士は明るい笑顔で阿笠博士達を出迎える。
「おぉ、久しぶりじゃのう木村君！」
阿笠博士と木村博士は握手をする。
「おや？そちらの子供達は孫か何かか？」
「いや、違うよ。近所の子供達でね、この研究所を見学して夏休みの宿題の自由研究にしたいそうなんじゃよ。」
そう言うと子供達はメモ帳を取り出し、自由研究の課題をこなそうとする。
「そうか、そちらも？」
今度は蘭と園子に問いかける。
「私達はただの施設見学で～す♪」
と園子が元気に答える。
「それで早速じゃが…」
「あぁ、早速見せる。ちょっとだけ待っててくれ。」
木村博士は研究室の奥に行ってしまう。
「見ろよ、むずかしそうな本ばかりだぜ！」
「本当ですね。」
「歩美、読めない。」
と、元太、光彦、歩美がはしゃぐ。
「こらーあんたらはしゃがないの！」
園子が注意する。すると木村博士が奥から戻ってきた。手には箱があった。
「これが『例の物』なんだがね。」
木村博士が見せた箱の中には『人の手よりも大きい蜂（ハチ）』の標本がかざられていた。その蜂の横に飾られている小さな蜂は同種類の蜂である。
「これは…」
阿笠博士はおどろく。蘭や園子も見てびっくりし、顔が引きつる。
子供達もおどろくがコナンと哀は冷静な顔をしている。

「すごいわね…」
「あぁ…」
2人はまた小声で話している。
「突然変異ですか？」
と、光彦が問いかける。
「いや、ちがうよ。」
と、答える木村博士。
「突然変異って何だ？」
元太はコナンに聞く。
「生物体に親の系統になかった新しい形質が突然現れ、それが遺伝する現象のことだよ。」
と、コナンは答える。
「これが、この蜂を生んだ『問題の原液』なんだ。」
木村博士が持ってきたのはハチミツのような液体が入ったビンである。『問題の原液』とは中に入っている液体の事であろう。
「我々は『ハニーゼリオン』と勝手に名をつけて呼んでますが…」

『ハニーゼリオン』……
この液体が…
蜂をこんなに大きくさせてしまった…

「なぁ、これどんな味がするんだ？」
元太が木村に問いかける。
「少し甘みがあるんだ。まぁハチミツと似たようなもんだがね。」
と、答えると元太は木村博士からビンを取り…

『ハニーゼリオン』をなめようとする…

「何をしてるんだ！！」

大声を上げて元太がハニーゼリオンをなめるのを食い止めた男。
「…ハァ…ハァ…ハァ…ハァ…ハァ…ハァ…」
男は元太からビンを取り上げる。
「おどろいたなぁ、宮藤君じゃないかぁ…」
男の名は宮藤。
「おどろいたのはこっちですよ！何子供にハニーゼリオンをなめさせようとしてるんですか！？」
宮藤は息をきらしながら怒っている。
「これはまだ研究中の未知なる物質！人間が口にしたら何が起こるかわからないのですよ！？」
と、言い出した。
「あ、あぁ、たしかに…すまない…こちらがウッカリしていた…」
木村博士は謝罪する。
「元太君、あれ飲んじゃったら巨人になっちゃってたかもよ。」
歩美の言葉で不安になった元太はあわてて水を一気飲みする。
「ま、実用段階になったらご賞味願います。今のところ蜂の幼虫やサナギを使って実験中です。この蜂の倍を見てもわかるようにロイヤルゼリーの何百倍かの効力があるのはたしかなのです。」
木村博士はそう説明する。
「あぁ申し遅れました、私はこのハニーゼリオンを研究している研究主任の『宮藤善孝』でございます。」
宮藤は自己紹介する。
「よろしく。」
宮藤は頭を下げてあいさつする。

「あぁ、こちらこそ。」
コナン達もあいさつする。

そのころ、あるイモ畑では…
ガガガガガガガガガガ！
一台の耕運機（こううんき）が畑を耕（たがや）している。
「おや？」
耕運機に乗っている男が畑のある異常に気づく。

……モコ……

ボコボコボコボコボコボコボコボコボコボコ！！

いきなり地面が盛り上がった。その盛り上がりようは先ほどの脱線事故のような感じだった。
「わ！うわ！？」
男は怖くなり、耕運機を捨てて逃げ出す。
「助けてくれ！！助けてくれぇぇぇぇ！！」

いきなり土が盛り上がる…

これと、あの脱線事故…

どういう関係があるのでしょうか…

続きをお楽しみに…

File．4『現れた恐怖』

コナン達が木村博士や宮藤と会っているころ、毛利小五郎は梶田警部から裏山の変死体の事をいろいろと聞いてから捜査に乗り出す。
「では、さっそく裏山へ行きましょう。」
小五郎はドアを開けて研究所の庭に出ようとする。
「あぁ！ダメです！庭に出ては！」
いきなり梶田が小五郎の庭からの外出を止めた。
「え？何故です？」
小五郎は問いかけると。
「実はあなたを呼んだ事を秘密にしているのです…『彼』だけに…」
「『彼』って？」
「最近うちの山梨県警に配属になった男がいるんです。その男は元は兵庫県警だったのですが、いきなりうちに来たいと言い出しましてね…それで我が山梨県警に配属になったんです…」
「その男に何故、私がここに来てる事を秘密にしているのですか？」
「それは…」
梶田は言い出しにくいようだ。
「……私が直接確かめましょう。」
小五郎はいきなり言い出し庭に出る。
「あぁ！」
梶田は止める事ができなかった。
「これは…」
小五郎はおどろいた。庭には温室があった、そして温室の周りを鑑識官達がいろいろと調べていた。元刑事の小五郎にはすぐにこれが何なのかわかった。
「ここでも何か事件が？」

小五郎はこれが事件現場だとすぐにわかり、梶田に問いかける。
「えぇ…六日前、この温室のすぐそばで殺人があったようなんです…それを捜査しているのですが、まだ重要な手がかりすらつかめていないのですよ…」
「六日も？それはご苦労様で…よかったら私もここの捜査に協力を…」
「ありがたいのですが、先ほど言いました男がここの捜査の責任者でして…」
「その『彼』が気になるのですが、何故私と会わさないのですか？」
「それは彼が…」

「梶田警部！何してるんすか？」

と、いきなり声をかけて来た男がいた。
「あ！あぁ『西井』君！」
男の名は『西井卓（にしいすぐる）』、山梨県警の刑事で元兵庫県警。兵庫県では『兵庫の鬼』と呼ばれていた。太っているが頼れる男だ。
「ん？おまえ…」
西井は小五郎の顔を見ると不機嫌そうな顔をする。
「何だ？俺に何か文句でもあんのか？」
小五郎は強気な言葉で問いかける。
「あぁ、西井君！コチラは東の名探偵毛利小五郎さんだ。」
梶田がそう言うと。
「えぇ…知ってますよ、この探偵とは思えない『クソ探偵』の顔わね！」
西井は突如暴言をはく。
「な…何だと！？」
小五郎も怒りだす。

「まぁまぁ落ち着いて、お二人とも…」
梶田はなだめるが、西井は止まらない。
「あっしはな！こんなテレビや雑誌にチマチマチマチマと出てる探偵らしくないヤツが大嫌いなんじゃ！」
「んだと！？」
「あの沖野（おきの）ヨーコとかいうアイドルにデレデレデレデレしおってよぉ！ちったぁマシな大人になれや！」
「おまえ！ヨーコちゃんをバカにするのか！！」
「ちゃうわ！おまえをバカにしとるんじゃ！！」
「何だと！？」
しばらく二人は口げんかをしていた。
「二人共、落ち着いて…」
梶田は力不足のようだ。

「みなさ～ん、差し入れ持って来ました～！」

やって来たのは、たくさんのおにぎりとお茶を乗せたおぼんを持って来た奥平姉妹だ。やっと晶菜は目が覚めたようだ。
「お！いただこう！」
鑑識や警察官が次々とおにぎりとお茶を取って行く。
「はい、どうぞ。」
晶菜が明るい声で小五郎と梶田の前におぼんを出す。
「お！有り難くいただくとしよう！」
小五郎はおぼんからおにぎりを取る。さっきのケンカはどうなったのだろうか。

モグモグ…

「…うめぇぇぇぇ！」
小五郎は感動する。

「それはもう、うちで研究して作り出した、おいしいお米ですから！」
晶菜がエヘンと自慢する。
「アンタが自慢することないでしょ！」
後ろからツッコミを入れた姉の美月。
「あ、お姉ちゃん！」
「あ、お姉ちゃん！じゃないでしょ、まったく…」
美月はハァッとため息をつく。
「あれ？」
小五郎が何かに気づく。
「さっきまで俺と口げんかしてたアイツがいない。」
小五郎と口げんかしていた西井はいつの間にか、いなかった。
「あれ？どこ行ったんだろう？」
梶田も気づいていなかったようだ。
「まぁ良いや、梶田警部、私は裏山に行きます。」
と小五郎はすぐさま裏山へと向かう。
「それにしても西井君はどこに行ったんだろうか？」
梶田は辺りを見渡すが西井の姿はどこにもなかった。

そのころ西井は……
「ふぅ…危なかったぁ…」
西井は何かから逃げて来たようだ。
「ふぅ…うまく動けやしない…ま、悪いのはあっしなんやけどな…」
西井はやれやれと言う。

「助けてくれぇぇぇぇ！」

畑の方から助けを求めながら走って来る百姓の男が一人。
「どうした！？」
西井は助けとなり、百姓に問いかける。
「あ…あぁぁ…ちち！…つ…つちが……」
百姓は震えた声で話す。
「え！？何て？」
震えた声のため西井は聞き取る事ができない。
「土！！土！！ボコボ～コボコボ～コ！」
「あ～もっとわかんなくなっちゃった…」
ますます困る西井。
「畑が…土モッコリ……」
百姓は力尽き気絶した。
「おい！！…畑で土がボコボコでモッコリ？どういう事だ？」
西井は気になり百姓を木に寄り添わせて寝かせ、畑へと向かう。

宮藤はコナン達にあいさつをした後、庭に出て気分を落ち着かせていた。
「よ！宮藤！」
宮藤に声をかけたのは同じ研究仲間の『四賀勇樹』である。
「あぁ…」
「おめでとう、君も学会に認められる日が来たね。」
四賀はニコッと笑い、宮藤を祝福する。

「ありがとう、四賀。」
宮藤は研究仲間に祝福される事にうれしさを感じる。だが……
「けど…『あんな事』が起きるなんて…」
宮藤は暗い顔をする。
「うん、あれ以降何も無いが、あのハニーゼリオンは危険な物だ。十分に注意しなければいけないな。」
「そうだな…」
宮藤はそう決める。

タッタッタッタッタッタッ

宮藤と四賀は畑の方へと走って行く西井を見かける。
「あれ？刑事さんだ。」
「どうしたんだろう？」
二人は西井を追いかける。

研究所内

「みなさん、我が木村農事研究所の事はわかってくれましたか？」
ゆかりはバスガイドのようにコナン達、見学者に話しかける。今彼らがいるのは研究所内の一階にある食堂であり、そこでコナン達はお茶やジュースをいただいている。
「はーい！！」
少年探偵団の歩美、元太、光彦と蘭と園子が元気良く返事をする。
「何かご質問はありませんか？」

ゆかりはまたバスガイド風に問いかける。
「はーい、質問！」
歩美が質問する。
「はい、何でしょうか？」
「温室では何の研究をしているのですか？」
と、先ほどから何の答えも無かった温室の事を聞く。
「あ、今は先ほど話したハニーゼリオンを培養している蜂などがいますので、つまりハニーゼリオンの研究をしているのです！」
と、やっと温室の事を答えるゆかり。どうやらハニーゼリオンの事を言うまで話さなかったようだ。
「そうだったんだ。」
みんなは納得する。
「じゃあ何で見せてくれないんですか？」
蘭が質問する。
「それは…」
それは言えないだろう、その温室の前で殺人事件が起きたのだから。しかも、まだ犯人は捕まっていない。
「すみませんが、ハニーゼリオンの事は話せても研究しているところを見せる事はできません。」
と、やって来た木之本が答える。
「木之本さん…」
「ハニーゼリオンの事はこの研究所の限られた人物しか知らない機密事項。いわばトップシークレット！だから客人であるあなた方にも研究しているのを見せることはできません。」
と、いろいろ理由をつけて見させないようにする。
「そうなんですか…」
コナン達は納得する。
見たかった、温室…

哀はがっかりしている。
「…という事なので温室は見せれません、申し訳ございません！」
ゆかりはコナン達におわび申し上げる。
「では、続いて質問のある方はいませんか？」
ゆかりは聞くと園子が手を上げる。
「はい、何でしょう？」
ゆかりが聞く。

「後ろにある土の山は何ですか？」

「え？」
ゆかりは後ろの窓の外を見る。外には広い庭があり、その庭の真ん中にモッコリと大きな土の山がある。
「あれ？あんな土ありましたっけ？木之本さん。」
「いや、無かったハズだけど。」
木之本は答える。だが、その次の事だった…

ボコボコボコボコボコボコボコボコボコボコボコ！！

なんと土の山が盛り上がり大きくなっていった。
「えぇ！？」
「何だ、ありゃ！？」
コナン達はおどろく。いきなり土が盛り上がっていくのだから。
「何なの、これ！？」
「手品じゃないよな！？」
みんな、これが何なのか、わからなかった。

だが…すぐにそれの正体がわかった。

グァゥ！！

「え！？」
いきなり獣の鳴き声が聞こえた、それは幻聴ではない、この場にいるみんなに聞こえたのだから。
「何！？今の鳴き声？」
「どこかにライオンがいるのか！？」
「日本にライオンはいませんよ！」
歩美、元太、光彦がオロオロとおびえる。

ボコボコボコボコボコ！！

さらに盛り上がる土、その土の中から光る二つの目が現れた。

ガゥゥゥゥゥゥゥゥ！！

土の中から現れたのは…

とてつもなく巨大な…

体長５０メートルもある…

『モグラ』だった…

Ｆｉｌｅ．５『巨大モグラ捜査の開始』

イモ畑

「あれか…」
西井は先ほどの百姓の言葉が気になるので畑に行き、調査をする。
「これが言ってた土がモコモコかぁ、何で盛り上がったんだ？」
西井はスコップを手に取り土の下を掘り始める。

ザック　ザック　ザック

「何してるんだい？」
西井に話しかけたのは西井を追いかけて来た宮藤と四賀だった。
「宮藤さんに四賀さん。」
西井は二人に気づく。
「先ほどここの人が何かに恐れて逃げて来たんです、それで聞いてみたら『土がモコモコ』とか『土がモッコリ』だとか意味がわからない事を言うんですよ。」
「それで気になって？」
「えぇ、今調査してるところなんです。」
先ほど小五郎と口げんかしていた西井がこんなに敬語を使うとは。
「それにしても、この土の山は何でしょうかね？」
「さぁ僕にはわからない。それにこれは上から土を乗せていったというよりも下から盛り上げたような…」
「下から？」

プルルル♪プルルル♪

携帯電話の着信メロディーが鳴る。
「あ、失敬…」
西井の携帯電話が鳴っていたようだ。
「はい、もしもし。」

〔大変だよ！西井君！〕

電話の相手は梶田警部だった。
「あぁ、警部。何が大変なんですか？」

〔『モグラ』だよ！〕

「……え？警部、『モグラ』ってどういう事です？」

〔研究所にとてつもなく巨大な『モグラ』が現れたんだよ！！〕

「ハァァ！？巨大な『モグラ』！？」
その言葉に反応する宮藤と四賀。
「西井刑事、行こう！」
宮藤は西井の手を無理やり引っ張る。
「え！？え！？何ですか！？いきなり！」
「もしかしたら、それは本当かもしれない！！」
「え！？ちょっと宮藤さん！宮藤さんまで何を言い出すんですか！？」
西井はさっぱりわからなかった。

だが研究所に来てみれば、それが本当だと気づく……

木村農事研究所

ここでは、本当に大変な事が起きていた。

グラァァァァァァ！！

巨大モグラが研究所近くで現れて研究所を破壊しようとしている。
今は警察官達が拳銃で対応しているが、歯がたたない。

グオォォォォォ！！

コナン達客人達は研究所の研究員達により、すぐさま避難された。
「何であんなに巨大なモグラがいるんですか！？」
園子が研究員達に訴えかけるように聞く。
「さぁ、私にはわかりません…」
一人の研究員が答える。
「蘭！無事か！？」
巨大モグラが現れたと連絡を聞き裏山から降りてきた小五郎。
「お父さん、無事よ！」
「それはよかった。」

娘の無事を喜ぶ父。
「モグラだったか…」
木村博士がいきなり独り言を言い出す。
「どういう事かね？」
阿笠博士が聞く。
「六日前、ハニーゼリオンを培養している蜂の巣が何者かに荒らされ蜂の幼虫やサナギが全滅したんだ…」
木村博士は答え、その話しと巨大モグラの件、どういう関係があるのか先ほどまで研究所内を見学していたコナン達は理解した。
「もしかして…」
蘭は恐る恐る声を出す。それを木村博士が答える。

「そう、その犯人が奴（やっこ）さんだったってワケだ…」

木村博士は震えている。
「すると、モグラがハニーゼリオンを食べて…」
コナンは言った、この恐ろしい現実の答えを。
「こんな事にならなければと思っていたのに…」
木村博士はくやむ。

グラァァァァァァァ！！

巨大モグラは一暴れして疲れたのか地面に潜っていった。

ボコボコボコボコボコボコボコボコボコボコボコボコボコボコボコボコボコボコ

金城村

村は巨大モグラのせいで大惨事になっていた。
「うひゃぁぁぁぁ…こりゃヒドイなぁ…」
西井刑事はこの村で巨大モグラに関しての調査をしている。
「被害が大きすぎるな…」
この村は地震でもないのに家が壊されている、時には地面に沈下(ちんか)している。畑や田んぼがメチャクチャになっていて作物が食べれない状態となっていた。牛や馬、ニワトリなどの家畜もすべて巨大モグラに食べられてしまっていた。
「こりゃぁ早くあの巨大モグラをなんとかせにゃぁなりませんで、宮藤さん。」
西井は後ろにいる宮藤にしゃべる。だが宮藤は何も話さない。
「……宮藤さん…」
西井は宮藤が何も話さないワケを知っているがあえて何か話しかけるのが西井刑事のやり方である。
「宮藤さん！聞いてるんすか！？」
西井は大声で宮藤を呼ぶ。
「え！？あ…あぁ聞いてるよ！」
宮藤は西井の声で気づく。
「宮藤さん、ウソはなしっすよ！」
西井は宮藤が先ほどまでの聞いていなかったのを見抜いた。
「そうだよ、宮藤。」

もう一人、西井の後ろにいた四賀が話しかける。
「君の気持ちはわかる、だが今は『自分の失態』をどうにかするのが先だぞ！」
と、四賀は何故か遠回しに傷つける言葉で宮藤を元気づける。これでは意味がないと思うが。
「う…うん……」
宮藤はさらに元気のない、落ちこんだ声を出す。
「四賀さん、フォローになってないよ。」
西井は四賀にツッコむ。

「この辺りもすごい荒れようですね…」
「次あっちに行ってみましょう…」
農事研究所から木村博士やコナン達がやって来る。
「博士、無事だったんですね！」
宮藤が博士達のもとに駆け寄る。
「あぁ、宮藤君も無事でなによりだ。」
「えぇ…けど…」
宮藤は暗い顔で言う。

「……これは…この大惨事は…僕の責任です…」

宮藤は責任を感じている。

「所長！！」

突如、村の百姓が大声を上げてやって来た。
「何だい？みなさん。」
「木村農事研究所っちゅう所は、わしら百姓の首をくくるっちゅう事を研究しとるんかい！！」
と、とても怒っている。

「見ろよ！この惨劇を！」
百姓は周りを見るように言った。
「田畑はメチャクチャにされる！家は壊される！牛や馬はあの巨大モグラに食われちまった！」
「いったい、どう責任をとってくれるんじゃ！！」
どこで聞いたのか、巨大モグラが生まれたのは木村農事研究所からだと知ったようだ。その言葉の嵐に木村博士も宮藤も何の言葉も出なかった。
「すみません…」
としか出なかった。
「すみませんで済むか！」
「宮藤さん！あの巨大モグラの生みの親っちゅうのはアンタだってな！」
ついに出た、いやな言葉。
「あんな化け物を作るのがアンタの研究じゃったんかい！」
百姓は宮藤に対し怒りをこめた言葉をぶつけた。
「みなさん！言い過ぎですよ！」
「そうよ！そこまで言う必要がある！？」
蘭と園子が百姓達を止めるが百姓達の怒りは止まらない。若い女性二人に言われても止まらないとは、それほど宮藤に対し怒っているのだ。宮藤は黙っている。言葉が出ないのだ。
「これは所長である私の責任です…真に申し訳ありませんでした…」
宮藤に代わり木村博士が答えた。
「ふん！そんな言葉で全部おさまるなら警察はいらねぇよ！！」
百姓はまだ怒っている。
「おい！アンタ刑事さんだろ！この巨大モグラ作ったコイツ捕まえてくれや！」
百姓の一人が西井に言う、後ろの百姓達も、そーだ！そーだ！と言っている。

「それは無理ですね…」
あっさりと答える西井。
「簡単な理由は三つ…一つは、逮捕状が出てないという事…もう一つは、これは事故と警察が判断しているという事…さらにもう一つは、仮に宮藤さんが、あの巨大モグラを『わざと』生み出したのなら、その証拠を見つけなければならないという事です…」
と長々しく西井は百姓達に説明する。
「以上です…おわかり？」
西井の説明に百姓達は何も言わない。今の長い説明が効いたようだ。
「…よろしい！」
西井はすぐ梶田警部のところに行く。
「すみませんが警部、私に巨大モグラに関しての捜査をやらせてほしいのですが…」
「え？かまわないが君が担当している温室前の殺人事件はどうするんだい？」
「あぁ！それなら、あっしよりも頭の良いヤツ連れて来ましたんで、そいつ使ってください。それでは！」
西井はそう言い去って行った。
「何か身勝手だな…」
小五郎はボソッと言う。
「代わりって誰だろ？」
梶田はそこが気になる。

これより『巨大モグラ』がどうして現れたのか…
その捜査を…

西井刑事が命をはって…

捜査する…

File．6『西井の推理』

西井刑事は巨大モグラを探す前に温室に行き、なぜモグラが巨大化したのか、その捜査をしている。
「ふむ…」
西井はこの温室の事を調べている、モグラがどうやって温室に入りこんだのか…

場所は変わり、研究所内…

コナンは西井の代わりにやって来た者と会っていた。
「西井刑事の代わりに来たってのは、おまえだったのか、服部(はっとり)…」
「何や工藤、俺が来んの、いやなんか。いややなぁ…そういうの…」
やって来たのは、コナンの良きライバル『服部平次(へいじ)』であった。

「いやじゃねぇが何でおまえがあの西井刑事の代わりに来たのかを疑問だ。」
「あぁ、西井はんは元兵庫県警でな、何度か兵庫に行った時世話になっとったんや、そのよしみでな。」
と説明する服部。
「ん？けど甲子園の時は会わなかったぞ。」
「その時はもうここ山梨に赴任した後やったからな、タイミングが悪かっただけや…」
「ふーん、何でわざわざここ山梨に？」

「さぁな、あん人はあまり自分の事を話さん人やからな。何か理由アリのようなんや…」
服部は西井の事を話す。

そしてコチラは小五郎が参加している裏山で見つかった変死体事件の捜査会議所…であるが…

「これが、モグラの歯形です。」
生物学者でもある木村博士が普通のモグラの歯形の模型を持って来た。
「検査の結果、死体の傷痕と一致しました。」
と鑑識が答える。
「つまり、あの変死体は巨大モグラに襲われて？」
一人の刑事が問いかける。その言葉に、この会議に参加している警察官達がゾッと恐怖を感じる。
「はい、そうなります。ただこの時は、あそこまで大きくはなっていない時だと思われます。まだ大人ほどの大きさだったと思われます。」
「巨大モグラをやっつける方法はありませんか？弱点のようなモノは？」
小五郎が問いかける。
「弱点といえばまず…光線に弱い事です、それに行動がにぶいため外敵から攻撃を受けた場合地に深く潜っていく習性があります。」
と木村博士はモグラについて話す。

金城村から離れた所にある谷…

そこで巨大モグラの行方を探している『巨大モグラ捜索隊』…

「おそらく第二次周地を中心とした半径1キロ以内にモグラの巣があると思われます。」

と予想したのは木村農事研究所の研究員である『三谷中広(みやなかひろ)』。

「では、そこを中心に捜索しましょう！」

と張り切るのは山梨県警の女刑事『片山百合香(かたやまゆりか)』。

「モグラってどういう所に住むんだ？」

「モグラさんは土の中じゃない？」

「木の上って可能性もありますよ。」

と何故かついて来ている少年探偵団。

「ちょっと…何でこの子達ついて来てるの？」

片山は一人の警察官に問いかける。

「ハァ、私にはわかりません…」

と、答える。

「君達～モグラの捜索は、お姉さん達刑事さん達がやるから君達はどっかに遊んでらっしゃい。」

と片山は少年探偵団をどこかにやろうとする。

「私達少年探偵団です！」

「モグラの捜索手伝わせてください！」

「巨大モグラを取っ捕まえてやるぜ！」

と、少年探偵団は意気ごみを見せる。

「……少年探偵団って……ププ…」

片山は笑っている。子供達の言葉をバカにしてるようだ。

「バカにするな！」

「そーだ！そーだ！」
少年探偵団は怒る。

そのころ、西井刑事は…

ザク　ザク　ザク　ザク　ザク

温室の地面をほっている。

カキンッ！

シャベルが土の中にある『何か堅い物』に当たる。西井は小さなスコップで辺りの土を除く。
「……やはり…」
この温室はガラスが二重になっている、だがモグラがそのガラスをわってまでして入るほどおいしいエサなのだろうか、蜂は。
「あそこのガラスはわれているが…」
そのガラスの破片は温室の外側に落ちている。もし、仮にここをわって入って来たのなら破片は内側に落ちるハズだ。
「そして、『コレ』だ。」
西井が見ているのは地面の下にあった物。コンクリート堅めとなった床下だ。
「モグラはこんな硬い物はほるどころか削ることすらできない…つまり、これは…」

西井刑事は推理した。
「これはただの管理ミスじゃない、これはあきらかに…」
「誰かが人為的にモグラを入れたんじゃないか…」
「そう、誰かがモグラを！…え？」
今のは西井の後ろから声がしたのだ、西井は振り向くとそこにはコナンと服部がいた。
「アンタもそう思て、この温室調べとったんやろ？」
服部は問いかける。
「あぁそうや、服部。あん人の管理ミスやのうて誰かの仕業ちゃうかと思ってなぁ、調べといてよかったわ、おかげで確信できた。」
西井はコナンと服部に向かって言う。
「これはあきらかに『人災』やってな！」

Ｆｉｌｅ．７『西井刑事と宮藤さん』

西井刑事はひとまず六日前に怪しい人物がいなかったかを研究員達に聞きに行った。そしてコナンと服部は温室に残って殺人に関する捜査を合同で乗り出す。

「とりあえず工藤、西井はんの推理が正しかったらとしたらやなぁ…」

服部はコナンに話す。

「あぁ、俺もおまえと同じ事、考えていた。」

「ほんならわかるわな？多分ここで起きた殺人、動機は恐らく…」

二人は同時に言う。

「モグラを温室に入れたのを見られて口封じに…」

そう、この被害者は口封じに殺されたのだ。

木村農事研究所　食堂

宮藤がすごく落ちこんだ顔で座っている。

「宮藤さん…」

美月が声をかけても反応がない、無言でそのまま座っている。美月

はどうすれば良いのかわからなくてその場を去って行く。
「あ！宮藤さん。」
美月が食堂から出て行ってそれからして西井が食堂に入って来た。
やはり西井が声をかけても反応がない、返事が返ってこない。
「宮藤さん！！」
西井が大声を上げると宮藤はビクッと反応を起こす。
「え！？あぁ西井刑事…」
宮藤からやっと返事が返ってきた。

「…そんで平次がなぁ！」
「へぇ！」
「おもしろ～い！あ、そういえば新一も！」
蘭と園子は平次といっしょに関西からついて来た平次の付添人で幼なじみの『遠山和葉（とおやまかずは）』と廊下を歩きながら話しをしている。
「ん？ちょっと待って！」
園子が蘭達を止める。
「どうしたの、園子。」
「あそこに宮藤さんと西井刑事が…」
園子が指差す方向は食堂、そこに西井刑事と宮藤が立って会話をしていた。園子、蘭、和葉らはおもわず聞き耳をたててしまった。
「宮藤さん、あっしはあんたが管理ミスをしてしまった、っていう事実、どうも信じられへんのですわ…」
西井の声が聞こえてきた。
「君はそう言うけど…あれは僕の責任だ…」
宮藤の声も聞こえてきた。
「そう自分を追いこむっていうの、止めたらどうですか？」
「だけど…僕はこの大惨事をどう償えばいいんだ！」

「償う気持ちがあるんでしたら、行動を起こした方がいいっすよ…」
西井は内ポケットから写真を取り出す。
「見てください、この温室の中を…」
見せた写真は温室の中を撮った写真だ。
「あの温室は窓二重、土の下はコンクリート堅め！こんな温室にどうやったらモグラが入るんすか！？」
「……では君は、誰かが温室にモグラを入れたとでも言いたいのか！」
「だって、そうとしか考えられないじゃないっすか！誰かが人為的にモグラを入れたとしか！」
西井の推理に宮藤は黙りこんでしまった。
「…君はこれから、それを捜査しに？」
「えぇ、この事件はあんたの管理ミスやないって証明したりますわ…」
そう言って西井刑事は食堂を出て捜査に乗り出した。蘭達は西井が出て来るのがわかったので、おもわず隠れてしまった。
「今の聞いた？」
園子が蘭と和葉に聞く。
「うん、聞いた…」
「あの刑事さん、この事件は『人為的なもの』だって…」
蘭達はその場を離れ、蘭は父、小五郎に報告しに行った。

そのころ、コナン達は…

「服部…」
「あぁ、これやな…」

コナン達は見つけた、『温室前殺人事件』で使われた『凶器』を。

そして、こちらは金城村…

村人達が集まって、何か会議をしている。
「もう…こうするしかねぇべ！」
「ホンマにするだか！？」
「するど！アイツのせいでこうなったんだかんな！」
村人達は何かをする気だ。

File．8『凶器』

木村農事研究所　　宮藤の研究室

毛利小五郎は宮藤の研究室を調べている、もしかしたら今回の事件の手がかりが見つかるのではないかと思ったようだ。
「ん？これは…」
小五郎は棚の上に置いてある一枚の写真を見つけた。その写真には『宮藤善孝』と『奥平美月』と『晶菜』と『木之本貴也』ともう一人、『男』が写っていた。
「こ…この男は……」

場所は変わり、温室…

蘭、園子、和葉は温室前を通っている。
「おぉ、和葉。」
コナンと服部が温室に使う道具を入れている小屋から出てきた。
「あら、コナン君に服部君じゃない、どうしたの？こんな所で？」
「このボウズといっしょに事件解決のための合同捜査をしてんねや。」
と服部はコナンの頭をパンパンと叩く。
てめぇ……

コナンは内心ムカッときている。
「それで捜査の方はどうなん？何か手がかりつかめたんか？」
和葉が聞く。
「この温室前での殺人で使われた『凶器』は何なのかはわかったんやけどな。」
「その『凶器』に証拠となるものがあるのか鑑識のおじさんに確かめに行くところなんだ。」
と服部とコナンは答える。
「なんや、もうすぐで事件解決やん。」
「そうだね、お手柄だよ、二人共。」
「せやから、さっそく持って行くんや、この『凶器』をな…」
服部が見せた『凶器』とは温室で穴が空いた時、板か何かでふさぐ時、釘を打つ時に使う『ハンマー』だった。

それを木陰から見ている怪しい人物が一人…

研究所内

奥平美月は研究所のロビーで一人座って一枚の写真を眺めていた。
その写真は宮藤の研究室にあったものと同じものだ。
「『しーちゃん』…私、どうすればいいかな…」
『しーちゃん』、それは見知らぬ男のことだ。美月は携帯電話を取り出す。

今かけても無理だろうな…

仕事中だと思うから…

でも、こんな時だからこそ…

相談にのってほしい…

『しーちゃん』は美月の相談相手のようだ。

「お姉ちゃん？」

晶菜が美月に声をかける。

「晶菜…」

「宮藤さんのことで悩んでたの？」

「うん、私にできること…無いかなって考えてたの…けど、全然思い付かなくって…」

「お姉ちゃん…お姉ちゃんにしかできないこと、絶対あるハズだよ！ね、元気だして！」

「晶菜…ありがどうぅ…」

美月は晶菜の気遣う言葉に感動し泣きながら晶菜に抱き着いた、晶菜はそんな美月の頭をなでる。

「お姉ちゃん、大丈夫…こんな事件、すぐに解決して宮藤さんも元気になって、いつもの笑顔を見せてくれるよ、きっと…」

「……うん…」

今、服部はコナンを蘭達に預け、一人刑事達のもとに行く。

俺に任せられたんわ温室前の殺人…
やけど、これが解決したら今度は『巨大モグラ』の捜索に参加せな
な…
工藤、ちょっと待っとれ…
すぐにこれ鑑識に届けて、あっちゅうまに事件解決やからな…
それからいっしょに『巨大モグラ』…
探しに行こうや…

服部は心の中で独り言をつぶやいていた。その時だった…

ガサガサ…

「ん？」
草むらから変な音がした。
「何や？そこに誰かおんのか？」
服部は問いかけるが返事がない、気のせいかと思い服部はふたたび
歩き始めた。が…

ガサガサガサガサ…

「んん？」
またもや音がした、そして音は服部が進む道の向こうにある物置小

屋に向かって流れていった。
「もう何やねん！？」
服部は物置小屋に向かう。

バァン！！

「誰や！？俺をおどかしてんのわ！！」
服部は物置小屋におもいきって入ったが、そこには誰もいなかった。
「あれ！？おかしいなぁ…こっちに来たんかと思たんやけど…」
服部は物置小屋から出ようとした、その時だった…

ドガッ！！

服部が何者かに大きな石で頭を叩かれた、服部はその場に倒れ気を失った。その者は服部が持っていた『凶器』と思われる『ハンマー』を奪い持ち去ってしまった。服部は気を失っており何もできなかった。

そのころ小五郎は…
「犯人がわかったぞ！」
小五郎は自信満々に言う。

小五郎が推理し判明した犯人とは！？

そして服部を襲ったのは、何者なのか！？

File．9『しーちゃん』

服部…服部…

誰や…俺を呼ぶんわ…

「おい！！服部！！」
服部は目が覚める、何者かに頭を叩かれ気を失っていたのだ。
「工藤！」
「服部！どこも悪くないか！？」
「あぁ、やけど何かで頭を叩かれたようなんや、おかげで頭いた…」
服部は何かに気づく。

「あ！はうはあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

いきなりスットンキョーな大声をあげる服部、それにびっくりするコナン。
「な！？何だ？」
「『ハンマー』が無い！」
「なんだって！？」
服部は自分の体をあちこち手探りで『ハンマー』を探したが無い。
「何でや！？何で無くなってんねや！？」
「おい！まさか、おまえが殴られた時に！」
コナンは気づいた、服部を殴ったのは恐らく『温室前の殺人事件』の犯人で、犯人が服部を殴ったのは『ハンマー』を奪うため。

「くぅぅぅ！なんちゅうミスをしたんや、俺は！！」
「くやんでてもしかたない、とりあえず『ハンマー』を探そう！」
コナンと服部は『ハンマー』を奪った犯人を探しに行く。

木村農事研究所

小五郎は研究所にある公衆電話で何処かに電話をしている。
「え～…え～…そうでしたか…え～…それはどうも…ありがとうございます！失礼しました！」
小五郎は公衆電話の受話器をしまう。
「やはり、俺の推理は正しい！」
小五郎は満面な笑顔で自信満々となっている。

研究所庭

コナンと服部は急いで『ハンマー』を奪った犯人を探している。
「ん？どないしたんや？『ハットリくん』に『江戸っコ』。」
西井刑事だ、何故か西井刑事は服部のことを『ハットリくん』、コナンのことを『江戸っコ』と呼ぶ。その理由はおそらく服部は同名の『忍者ハットリくん』から、コナンは苗字の江戸川から取って『江戸っコ』。
「あ！西井刑事！」
「すまんけど、俺達急いでんねや！」
「何や？そんなにあわてて。」

「俺達が手に入れた『凶器』を奪われたんや！」
「なんやて！！」
西井刑事もその犯人を探す事にした。

研究所内

蘭と園子と和葉は食堂で美月と晶菜と共に会話をしていた。
「へぇ、美月さんは晶菜さんと木之本さんと宮藤さんといっしょの大学の出身なんですか。」
「そうなの、あの頃は楽しかったなぁ…」
美月は五人が写っている写真を眺めながら思い出話をしている。
「晶菜はいつも寝坊するから起こすの大変だったのよねぇ。」
「お姉ちゃん、それはたまにだよ！」
「何言ってんの、たまにも何も無いわよ、あなたいつも寝坊してたじゃない。」
「まぁまぁお二人さん。」
園子が二人をなだめる。
「それで私達四人は宮藤さんを成績優秀な先輩として尊敬してたのよ。」
「『四人』？」
蘭達は数える。奥平美月に晶菜、木之本さん。宮藤さんは尊敬する先輩だから違うとして。
「あと一人は？」
蘭達は問いかける。
「『しーちゃん』だよ。」
晶菜が答えた。

「晶菜、それはあだ名。」
「『しーちゃん』はね、力持ちで力仕事は軽々やってくれる人なんだ。」
「そうなんですかぁ。」
「だけど突然いなくなっちゃったんだ…」
晶菜はちょっと暗い声で言った。
「いなくなった？」
「退学しちゃったの、私達に内緒で。」
「何で退学したんかも聞かされてないん？」
「そうなの、『しーちゃん』何も言わずに消えちゃったの。」
「晶菜それくらいにし…」
美月が止めさせた。
「じゃぁその人がどこで何してるかは知らないんですね。」
蘭が問いかけると。
「どこかで仕事してるのはたしかなんだけど、彼何も言ってくれないんだよね。」
美月はハァとため息をつく。
「さみしくありませんか？」
蘭がまた問いかける。蘭は気持ちがわかるのだ、長い間電話でしか話せてない人がいるから。
「さみしくなんかないよ、ちゃんと電話もくれるし、メールも返信してくれる。ただ…」
「ただ？」
「私、彼にひどいことしたから…」
「ひどいこと？」
「…ふったの、彼の好意を…」
「ええ！？」
「お姉ちゃん、『しーちゃん』は良い人だから付き合えばよかったのに。」
「そうなんだけど、何か付き合ったら、友達でいられなくなるかも

って思ったから…それが怖くて…」
「でも、もったいないなぁ…」
「あなたはそんなこと考えなくていいの。」
美月は晶菜にデコピンする。
「いった～い！」
蘭達はその様子にハハハハと笑う。

もしかしたら…

私がふったのが原因で『しーちゃん』…

大学辞めたのかも…

巨大モグラ対策本部

梶田警部ら警察や自衛隊が集まり巨大モグラの対策をたてている。
「警部殿！」
一人の警官がやって来た。
「巨大モグラ捜索隊が戻ってまいりました！」
「そうか、早く報告を聞きたい！」
「それが…皆負傷しております！」
「何！？」
「しかも何名か行方不明です！」

梶田は捜索隊の元へと向かう。捜索隊は医療班に傷の手当をしてもらっている。
「何があったか話せるかい？」
梶田は負傷している片山から聞き出す。
「ハ、みんな巨大モグラを発見したのですが、いきなり襲われ、この有り様です…」
と、片山は答える。
「何人かいないが、それは何故だね？」
「何名かは……巨大モグラに虫と間違われたのか食われてしまいました…」
片山は震えた声で話した。
「そうか、ご苦労だった…」
梶田は山に向かって手を合わせて拝んだ。

そんな、ある時……

〔あ～こちら毛利小五郎！毛利小五郎！この研究所にいる研究員のみなさん、山梨県警のみなさん！至急研究所のロビーに集まってください！〕

突如アナウンスから毛利小五郎の声が聞こえてきた。
「ハァァァ！？」

「おっちゃん！？俺ら急いでんのに！」
コナン達は腹をたてる。
「無視せぇ、先に犯人探さんと！」
コナン達はひとまず犯人探しの方に専念する。

はたして、毛利小五郎は何をするのだろうか。

Ｆｉｌｅ．１０『小五郎の名推理』

西井刑事とコナン、服部は道具置き場におり『ハンマー』が戻ってきてないか確かめる。
「…って犯人が『凶器』をわざわざなおしに来るわけないか…」
西井刑事らはウッカリしていた。
「けどな、これは持って行っとこ。」
服部が手にしたのは『道具貸出表』。紛失をした時、最後に誰が持って行ったかをわかるために作られた物だ。
「『ハンマー』借りた者達のチェックができるからな。捜査も順調になるし。」
服部は『道具貸出表』を持った。
「かならず返しに来てくださいね。」
と、道具小屋の管理人が念を押して言った。
「ハイハイ、わかりましたよと。」
西井刑事は管理人の名札を見た。名札には『万丈目』と書かれていた。
「へぇ、いるんや。」
と、独り言をする西井。
「え？」
「いや、何でもないんですわ。」
管理人はどういう意味なのかわからなかったのに西井は何も答えなかった。
「それでは……」
三人はせっせと小屋から出ていった。

三人は温室前を歩いていた、その時コナンは西井刑事に問いかける。
「ねぇ、さっきは何が『いた』の？」
「ん？あれか？」
西井は先ほど言った『いるんや』という言葉、コナンはそれが気になっていた。
「あの管理人の名前や、あの人の名前『万丈目』って書いてたんや。」
「たしかにめずらしい名字やけど、よーさんおるんちゃうか、その名前。」
「『万丈目』って名前はなぁ、あっしが昔見てた映画『ペギラ』に出てた主人公の名前なんや。」
と西井刑事は答え、説明する。
「『ペギラ』？」
二人は何なのかわからなかった。
「んん？何や、知らんのかいな、あの名作を。」
西井刑事はやれやれと首をふる。
「『ペギラ』っちゅうんわ南極に生息してる冷凍怪獣でな、大国同士の核実験が原因で生まれた怪獣なんや、口から冷凍光線はいて何でも凍らせてまうんや。」
西井刑事は『ペギラ』について説明し始める。
「その時南極の観測隊を襲ったんや、いやぁあれは怖かったで！」
コナンと服部はハァと興味なさそうに聞いている。
「そんでその時観測隊に記者として同行していたのが主人公の万丈目や。万丈目はペギラを倒すために調査を始めた…そんで見つけたんわやな！…」
コナン達はもう聞く気がなかった。

〔山梨県警のみなさん、研究所内のみなさん、至急集まってください！！〕

まだアナウンスしている小五郎のおっちゃん。
「まだやっとんのかい、あのオッサン。」
「西井刑事は小五郎のおじさんのことキライなの？」
「あぁキライや、探偵やのにバンバン雑誌に載るわ、テレビに出るわ、あっしにとっちゃぁ変なんや。」
「変？」
「何で探偵が雑誌やテレビに映るんや？顔覚えられたらコソコソ調べても有名人になって正体バレるやん、バレて仕事にならん、偽者も現れるかもしれん、そう思わんか？」
と、2人に聞く。
「まぁ正論やけどな。」
「一言言うけど、おまえら二人もテレビや雑誌に出すぎや。」
「え？俺は雑誌にチマチマ出るけど、坊主は出てへんで。」
「江戸っコはこの前『キッドキラー』とか言われて新聞沙汰になっとったやないけ！」
とツッコむ西井。たしかにコナンは『怪盗キッド』の盗みを妨害し何度も宝物を守っている。
「あちゃー」
コナンはちょっと恥ずかしがる。

そういやそんな新聞あったなぁ…

服部は心の中でつぶやく。

〔え～山梨県警のみなさん、研究所内のみなさん、至急集まってく

ださい！！」

「まだ言うとんのかい！」
西井刑事はアナウンスのスピーカーにツッコむ。
「わいらがおらんから言うとるんちゃうか？」
服部はそう予想する。
「ハァ…あのアホの推理聞くんはヤなんやけど…」
西井刑事はハァッとため息をつく。
「あとちょっと捜査してから行こっか。」
服部の提案に賛成し三人はもう少し捜査をする。

研究所内　　ロビー

小五郎はここに研究員達と山梨県警を集めた。その中には木之本や奥平姉妹、宮藤、ゆかりもいた。

『アイツ』がいない…

さては怖じけづいて逃げたなぁ…

小五郎が思う『アイツ』とは誰の事だろうか。
「さて、お集まりのみなさん、今から私が今回起きた『温室前殺人事件』と『巨大モグラ事件』の真相をお話しします。」
集まった人々はざわめく。
「ではまずお話しする事は温室についてです。」
小五郎は温室内の写真を見せる。

「この温室を見てください、この温室は窓は二重、土の下はコンクリートづめとなっています。こんな密室にどうやってモグラが入る事ができるでしょうか？」
小五郎は写真をポケットにしまい話を続ける。
「これは明らかに人為的にモグラを入れ、あのような巨大モグラを誕生させた犯人がいるという事です。」
えぇぇぇぇ！っとおどろく研究員達と山梨県警達。

ほとんど、さっき西井刑事から聞いた話だ…

と心の中でつぶやく宮藤。小五郎は人の推理をパクったようだ。
「そして犯人は宮藤さん、あなたの関係者が犯人なのです！」
「え？」
「犯人はあなたをこんな大事件を起こした危険人物として陥れるのが目的なのです。」
「それは…どういう事ですか？」
宮藤は問いかける。
「まず犯人はどこかでハニーゼリオンの事を知りモグラをどこかで捕まえて温室に向かい、窓ガラスを割って中に侵入、モグラを放置しハニーゼリオンを食べさせ巨大化させたのです、ところがそこに運悪く警備員がやって来てモグラを入れた事に気づかれた犯人は警備員を殺した、これが今回の事件の流れです。」
おぉぉ！と叫ぶ警備員達と山梨県警達。
「それで犯人は？」
梶田警部は聞く。
「それは宮藤さんに『恨み』を持ったある一人の『男』です。」
「『恨み』？」
「その『男』はかつて宮藤さんと同じ大学で勉強していました、宮藤さんと『彼』はそれは中がよかったそうで。」

誰の事だろう？…

宮藤は思う。

「その中には宮藤さんだけでなく木之本さんや奥平美月さんと晶菜さんもいたそうで。」

……まさか……

美月は何か思い付く。

「そんなある日『彼』は突如大学を辞めてしまった、辞めた理由は『彼』が宮藤さんの論文を奪ったからであります。」

え？…そんな…

美月はおどろく。

「それを大学教授達に見つかってしまい『彼』は大学を辞めてしまった、いやどちらかと言えば退学させられた、でしょうね。」

小五郎は話を聞いて美月はふるえる。

まさか…犯人は…

『しーちゃん』…

何で『しーちゃん』が…

美月は小五郎の推理を信じきれてない。

「それで犯人は、その『男』で決まりですね！」

「えぇ！犯人は宮藤さんの元大学仲間であり現在山梨県警に勤めている！」

小五郎は犯人の名前、『男』の名前を言う。

「『西井卓』刑事！！」

みんなショックを受ける。あの西井刑事が犯人だったとは。

「…え？」

美月はおどろく、西井刑事こと『しーちゃん』が山梨県警で、警察として働いていた事に。

「お姉ちゃん…」

晶菜もおどろいている。

「オイオイ『しー』のヤツ警察になってたのかよ…」

木之本もおどろいていた。

「みんな、ゴメン…」

宮藤が突然みんなにあやまった。

「え？宮藤さん！？」

「実は『しーちゃん』に口止めさせられてたんだ…彼みんなに出会うのが気まずいからって姿隠しながら温室前殺人事件の捜査をしていたんだ…」

宮藤はみんなに説明した。

「そんな…『しーちゃん』…気まずいだなんて…」

「気まずいことなんかないのに！」

「そうだよ！元でも仲間じゃん！いっしょに勉強してきた仲間じゃん！」

美月、木之本、晶菜らは気まずいということなどないというのに西井が顔を出さなかったことになげく。

「まさか…西井君が犯人だったなんて…」

梶田警部はショックを受けていた。優秀な部下が犯罪を犯したのだから。

「さっきからアナウンスで呼んでいるのに西井刑事は来ない。もしかしたら私に自分の罪を見破られたため逃げたのかもしれない。」

小五郎は梶田警部に指示を出す。

「さっそく捜索隊を結成して西井を引っ捕らえるのだ！！」
小五郎はハキハキと西井を捕まえようとする。

「待ってください！！」

宮藤が小五郎と梶田を止める。
「その推理、間違ってます…西井は、私の論文を盗んじゃいません！」
「ハァ！？私は確かめたぞ！しっかりとアナタが通っていた大学に問い合わせて調べたぞ！」
小五郎が電話をかけていたのは宮藤が通っていた大学で何故西井刑事が大学を辞めたのか理由を聞いていたためだ。
「…論文を盗んだのは大学の伊丹教授です…」
宮藤の告白に美月達はおどろいた。
「え？あの伊丹教授！？」
「あんな良い人が生徒の論文を盗んだ！？」
「あぁ…あれは『しーちゃん』が大学を辞める前の日だった…」

西井は大学で祖父が営んでいる畑を継ぐために大学の農学部に入学、少々気が荒く友達などできない感じであった、しかし宮藤だけが彼の気の荒さを気にせず友達として迎え入れた。西井は彼を尊敬した、彼の人の良さに尊敬していた。次に奥平美月と晶菜、木之本と友達もできていき、一つのグループ『ジャガイモ組』が誕生した。みんな農学で人々の生活の支えをしている百姓の手助けになれるようにがんばって勉強してきた。楽しく明るくと。しかしある日の事だった、西井は伊丹教授が宮藤の論文を盗んだという事を知り、伊丹教授に問い詰めた。
「論文を盗んだなぁ！！」
西井はすごい剣幕で伊丹教授の胸倉をつかむ。

「バカな事を言うな！俺は何も盗んじゃいない！論文『ミミズの環境汚染防止』なんて知らないぞ！！」
「何で論文のタイトルを知ってるんや！」
「…う……うるせぇ！！」
伊丹教授は西井を突き飛ばす。そして実験の時に使うメスを持ち西井に向ける。
「俺が出した方がいいんだ！俺の方がよっぽど良いんだ！」
「傲慢が！！」

パン！

西井は伊丹教授のメスを持っている手を弾き。

ガッ！

西井は伊丹の顔を殴る。
「キサマァ！これは退学もんだぞ！！」
「論文盗む泥棒に言われたかねぇで。」
そこに大学の校長がやって来た。
「これはどういう事だね…伊丹教授、西井君…」
校長は二人から事情を聞いた、もちろん伊丹教授は論文を盗んだ件で大学を辞めさせられた。西井は教授を殴った事により退学させられた。辞めた理由は大学の名誉を守るために『教授を殴った』ではなく『論文を盗んだ』に変更させられていた。

「と、しーちゃんは大学を辞めて出て行ってしまったんだ…」
宮藤は暗い顔で説明を終えた。
「しーちゃんがそんな事になってたなんて…」
「宮藤さんはいつそれを知ったのですか？」

木之本は問う。
「しーちゃんから直接聞いた、彼が温室前殺人事件の担当についた時に。」
宮藤は答えた。
「とりあえず西井を探させねばなりません、梶田警部、ご協力を！」
「はい！」
と小五郎と梶田が西井刑事を探しに行こうとした、その時だった。

「はーい、ストップ…」

二人を止めたのは西井であった。
「しーちゃん！？」
「ホントに刑事になってたのかよ！？」
「わぁしーちゃん！久しぶり♪」
美月と木之本は西井が現れた事におどろくが晶菜はのんきにあいさつをした。
「しーちゃん…君は…」
「わかってます、さっきの推理、そこで聞いてましたから…」
西井は小五郎と梶田警部の方を向く。
「あっしを犯人やと思おうとるようやな…」
「おう！動機も判明した！あとは取り調べて証拠さえ見つければ！」
「先に証拠探せよ、クソ探偵…」
「なにぃぃぃぃ！？」
「てか、小五郎の阿呆（あほう）よりも怒りたいのは梶田警部、アンタや！！」
西井は梶田に怒鳴る。
「え？何？」
梶田は何がなんだかさっぱりわからなかった。その言葉に西井はハァッとため息をつく。
「殺人が起きた六日前、あっしはアンタといっしょにコンビニの強殺の犯人を夜中ず～っと追いかけとったやないけぇ！」

西井刑事の言葉に思い出す梶田警部。たしかにあの晩は西井と共に犯人を追いかけ回していた。
「あちゃー…」
「あちゃー…じゃない！」
西井はツッコむ。
「まぁこういうこっちゃや、残念ながらあっしは犯人ちゃうで、オッサン。」
「むぐむむむむむむ…」
小五郎はくやしいのと推理を外したのとで顔を赤くさせた。
「しーちゃん！」
美月が西井に話しかける。
「あ…」
話しかけられたのに西井は気まずく感じてしまう。
「久しぶりだね…電話やメールはしてるけど…」
「後で話そう…今は…」
西井は周りを見る。
「たくさんの人が見てるから…」
西井は照れてる。その様子に美月はクスッと笑う。
危うく犯人にされるところだった…
西井は内心ホッとした。

こらぁぁぁぁぁぁぁ！！
宮藤の悪魔ぁぁぁぁぁ！！

出てこいやぁぁぁぁぁ！！

研究所の外から誰かが大声で叫んでいる、宮藤に用があるようだが恨みが大きくこめられている。

「何だ！？」

みんなが窓の外、研究所の玄関前を見ると、そこには大勢の村人達が押し寄せて来たのだ。

File.11『コナンと服部の推理』

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」
「宮藤ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！」
「殺したるぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！」
村人達が研究所の扉をぶち壊して研究所内に入りこんで来た。警察が宮藤を捕まえないから自分達で捕まえて殺してしまおうと考えたのだ、警察に自分達が捕まる事を覚悟の上で。
「大変！」
「逃げなきゃ！」
蘭や園子、木之本、奥平姉妹、小五郎達、研究員達や山梨県警らは逃げだそうとする、だが。
「ちょっと待っとれ。」
西井刑事は何故か外に出ようとする。
「え？しーちゃん！？」
美月は止めようとするが西井は止まらない。

「うらぁぁぁぁぁぁ！！」
「くらぁぁぁぁぁぁ！！」
「だあぁぁぁぁぁぁ！！」
村人達はクワや斧（おの）、木づちなどを持って暴れて来る。

ガチャ

西井刑事が玄関から出てきた。
「ったく…あの時言ったやろ…『警察が事故と判断してるのと逮捕状か巨大モグラを造った証拠がなきゃ逮捕できない』って…」

西井刑事はハァッとため息をつく。そしてスーツの内ポケットから『何か』を出した。

バキュゥゥゥゥゥン！！

西井刑事が取り出したのは銃であった、そして西井は弾丸を一発撃ったのだ。

「止まりぃや…」

西井は怖い眼でにらむ。

「もう一発撃つぞ…」

西井は銃口を村人の足元に向けながら言う。

「アンタ！どっちの味方や！あの巨大モグラの生み出したマッドサイエンティストを捕まえるのが役目やろが！？」

村人達は銃口におびえる。

「あん人はマッドサイエンティストやない！宮藤さんは罪をなすりつけられたんや！」

西井刑事は怒鳴る。

「んなもん信じるかい！」

「おめぇの言葉でハッキリできるかい！」

村人も怒鳴る。

バキュゥゥゥゥゥン！！

西井はもう一発撃った。

「わわわわわわ！！」

村人達はまたもや銃におびえだす。

「とりあえずアンタら…もうちょっと待ってくれへんか…あとちょっとで事件解決できるさかい！やから、ほんのもうちょっとだけ…待ってくれへんやろか！」

西井刑事は必死に説得する、さっきから銃をバンバン撃ってる人が

言う言葉か。
「頼むわ！この通りや！」
西井刑事はその場で土下座をする。村人達はその姿を見て殺気を静めた。
しーちゃん…
美月はその姿に心をうたれる。いつの間にか研究員達や山梨県警、小五郎達もここに来ていた。
「そう何分も何時間もかからないよ。」
と、西井刑事の後ろから声をかけたのはコナンと服部だった。
「江戸っコにハットリくん…もしかして、わかったんか！？犯人が！」
西井刑事の言葉にコナンと服部はコクッとうなずく。
「さっきアンタと離れた時『宿直帳』を調べとったんや。」
『宿直帳』とは、その日、誰が宿直をしたかを記録した記録帳である…
「書いてたんや、『犯人』の名前が…」
服部はパラパラッと宿直帳のページをめくる。
「おぉ、ここや…」
服部が見つけたページは六日前の宿直が誰なのかを書かれているページだ。
「ここに誰が書かれてるか見てみぃ。」
「ん～？」
西井刑事は宿直帳のページを見る。そこには『犯人』と思われる者

の名前が書かれていた。
「え？」
西井刑事はおどろいた。

『四賀勇樹』

「そう、犯人は四賀勇樹さんや！」
服部はビシッと四賀に指差す。
「な！？」
「ええ！？」
「四賀さんが！？」
「犯人！？」
研究員達全員が驚いた。
「え！？な！？冗談はよしてくれないか、たまたまだよ、そこに書かれてるのは、それに書かれてるぐらいで犯人にされちゃぁたまんないよ。」
四賀は犯人にされたのか、ちょっと焦っている、癖なのか脇をギュッと閉じている。
「第一証拠がないじゃないか。」
四賀が問いかける、たしかに証拠がない、宿直帳に書かれてるだけでは証拠にはならない。そのころコナンは少年探偵団にウインクをしていた。
「ねぇお兄さ～ん。」
「この村人さん達怖いです～」

「俺も怖ぇぜ…」
歩美、光彦、元太が四賀の足をユサユサとゆらす。
「え！？あ、ちょっと…」
四賀は何か焦っている。右脇に力を入れている様子。
「ね～ね～ね～ね～ね～」
三人は更に四賀をゆらす。

ゴトン！

四賀の服の中から何か重い物が落ちた、右脇からだ。

『ハンマー』だ…

「それは何や？四賀はん…もしかして、俺がさっきまで持ってた『ハンマー』ちゃいまっか？」
さっきまで子供達がゆらしていたのはこれを落とすためだったのだ、右脇に隠しているのはお見通しだったようだ。
「こ…これは……さっき研究所内で壊れた部分があったから…修理しようと！」
「だったらさぁお兄さん、道具貸出表に名前書いたの？書かなきゃ怒られるんでしょ？」
コナンの問いかけに四賀は何も答えない。
「…図星やな？」
「いや！書いた！書いたさ！道具貸出表に！！」
服部は道具貸出表を取り出しページをめくる。
「あれれ～お兄さんの名前がないよ～」
コナンの言葉に服部はギクッとする。冷や汗もかいてきた。
「え…え…えぇ…」

四賀は更にあせりだした。服部とコナンはニヤつく。
「つまり『ハンマー』を持っている時点で四賀さんが犯人だという証拠だよ…」
コナンは四賀をにらむ。

このガキぃぃぃ！…

四賀は歯をギリギリと鳴らして、くやしがる。
「あぁ……そうだよ…」
四賀は降参したようだ。
「俺がやったよ！巨大モグラ作ったのも、温室前の殺人も俺がやった！俺がやってやったんだよ！！」
四賀はいつものスマイルを忘れて本性を現した、この怒り狂った姿こそ四賀の本来の性格なのだ。
「宮藤！」
四賀は宮藤を怒りがこもった眼でにらむ。
「てめぇは先へ先へと俺より出世する！俺はガキのころから負けるのが大嫌いだった！だからそんなおまえがねたましかったんだ！」
これはひどい嫉妬だ。
「だからハニーゼリオンを利用して、こんな事態を引き起こしてやったのさ、おまえを…絶望のどん底にたたき落とすためにな！！」
「ハァ…すげぇバカだ…」
今の発言は西井刑事のだ。西井は頭をポリポリとかきながら発言した。
「……あぁあ…」
「バカだ、そんな考えしてるやちゃぁ…そんなにねたましいなら自分が相手よりすごい努力して見返してやればいい。それなのにおまえは努力もせず罪を被せた犯罪をやる…こりゃーとびっきりのバカでチャンピオン級のアホだ。」
西井刑事はさらに上乗せに発言する。

「てめぇ、俺をバカにするのか…」
「ん？バカにバカ言って何が悪い？」
四賀は西井刑事の言葉に怒り殴り掛かる。
「てめぇぇぇぇぇ！！」

ガシ！

西井は四賀の殴り掛かって来た拳をよけ四賀の腕をつかみ背負い投げをする。

ドサッ！！

四賀は地面にたたき付けられる。
「さて、逮捕と…」

ガチャッ

西井刑事は四賀の右手に手錠をかける。
「あっしはな、巨大モグラ作った事が重大で恐ろしい事やからおまえを捕まえたかったんちゃうで…」
西井刑事は四賀に話しかけている。

「アンタが宮藤さんに罪をなすりつけたからや…」

西井は宮藤を絶望に陥れたことをゆるさなかった。
「あん人はあっしの恩人や…しょーもないあっしを友として接してくれた、あん人に声をかけてもらえんかったら、あっしはずーっと黙り込みのまんまやった…やからそんな宮藤さんを陥れたアンタを絶対にゆるさんわ！」
更にコナンが話しかける。

「アンタは学者として…イヤ、人間としての失格者だよ…」
西井刑事は四賀を立たせて署に連れていこうとする。
「刑事さん、ちょっと待ってくれ…」
西井は止まる。
「もう一つ言ってなかった、俺がおまえをねたんだ理由…」
四賀は宮藤に話す。
「何だい？」
「……俺は気づいていたんだ…美月が…おまえのことを…好きになっていたことを…」
「え？」
宮藤はおどろく、自分の助手が自分に好意を持っていることを。
「…まさか…四賀さん…」
美月はおそるおそる問いかける。

「……俺は…おまえに……恋してたんだ…」

その答えに美月は少し顔を赤くした。
「だから、宮藤に…嫉妬っていうのかな…おまえが好きになってる宮藤の事がゆるせなかったんだ……」
「四賀さん…」
「だからよ、刑事さん…」
「ん？」
「『自分でまいた種は自分で拾う』よ…」
「はぁ？」

ドスッ！！

四賀は西井の腹をおもいっきり蹴った。
「て…てめぇ…」
西井は痛がり四賀は西井のポケットから銃を奪った。

「どけどけどけぇぇ！！」
四賀は銃口を村人達に向けて道を空けさせ進んでいく、いや、これは逃げて行くという方が正しいだろう。
「四賀！！」
宮藤が呼び止めても止まりはしない、四賀にかけられた手錠は片方にしかされていないため四賀はある意味自由の身だ。
「アイツ…いててて…」
西井は腹をさすりながら立ち上がる。
「アイツ…止めねぇと…」
「あぁ、止めな！」
「え？どういうこと？」
蘭は問いかけると西井は答える、最悪の答えを。

「アイツ…死ぬぞ！…」

Ｆｉｌｅ．１２『最後の言葉』

コナン達は四賀を死なせまいと追いかけようとする、その時に。
「木村博士！梶田警部！」
警察官がやって来た。
「巨大モグラを発見しました！」
巨大モグラ発見の知らせが入って来た。
「すぐに来てください！」
「四賀は恐らくそこに来ているハズだ！よし！みんな行くぞ！！」
木村博士と宮藤に奥平姉妹、木之本ら研究員達や梶田警部、西井刑事ら山梨県警、コナン達は巨大モグラが発見された岩山の洞窟へと向かう。

岩山　洞窟付近

洞窟付近にはマスコミが巨大モグラの情報をいち早く手に入れようと殺到していた、西井刑事ら山梨県警はそれをどかしていた。
「ここに巨大モグラが…」
この洞窟は自然にできたものではない、巨大モグラが掘ったものだ。
ここが巨大モグラの巣のようだ。
「お待ちしてました！」
片山がやって来て敬礼をする、腕や頭に包帯を巻いた姿をしている。
「片山！おまえ、大丈夫か！？前に巨大モグラにやられたんだろ！休んどけ。」
西井は片山の体を心配して言った。

「ですが…今は巨大モグラをどうかしなきゃいけないのです！休んで寝てる場合じゃありません！」
片山は自身の意気込みを見せた。
「よし！あっしらはモグラを探しに洞窟に入る、おまえはここでモグラが出てくるかどうか見張ってろ！」
「ハイ！」
片山は敬礼する。
「じゃ！あっしらはこれから洞窟に入るぞ！」
西井刑事ら山梨県警と自衛隊が洞窟に入ろうとする、その時コナンと服部も洞窟へと入っていく。

洞窟内

巨大モグラが穴を掘った後である巨大モグラの爪痕がところどころに残っている。西井刑事らはこの一方通行の洞窟をまっすぐ進んでいく、巨大モグラは恐らくまっすぐに掘り進んでいると思われるからまっすぐ進んでいるのだ。

モグラはどこだ…

この奥にいるのはたしかだが…

コナンは警戒しながら走る、体が小さい分警戒を強くせねばならない。

モグラの弱点は『光線』…

だから発光弾を用意しておいたが…

はたして聞くだろうか…
西井刑事も警戒している。ただのモグラと同じだが、かなりの巨大の差。ただの動物とし甘く見ない方がよいと思われる。

「待て！！」

誰かがみんなを呼び止める、洞窟の奥から声がした。何者かの影が見える、だが暗くてよく見えない、警察官の一人が懐中電灯の光を当てる、そこには…

「四賀！！」

そこには四賀がいた、後ろには大きな箱がある。
「何しに来た、これは俺の過ちだ…自分が仕出かした事は自分で片付ける…」
四賀はもう死ぬ気だ。
「出て行け…早く出て行け！！」
四賀はすごい剣幕でコナン達をいかくする。
「四賀！後ろにある箱は何だ！？」
「これか？これは…」
四賀は横に行き、箱に何が書いてあるかを見せる。

『ＤＹＮＡＭＩＴＥ（ダイナマイト）』

「な！？おまえ！まさか！それで！？」

西井は四賀が何をするのか理解した。
「あぁそうだ、これでモグラを殺す…そして…俺もあの世に行く！」
「バカなマネはよしや！」
「これだけしか方法はない！これは俺が引き起こした『人災』だ！
俺が止める！俺の手で！！」
「このアホンダラ！」

ガアァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！

洞窟の更に奥から動物の鳴き声が聞こえてきた。
「この鳴き声！」
「巨大モグラだ！この奥にいるんだ！」
山梨県警らが行く前に四賀が先に動き出してしまいダイナマイトのスイッチを押そうとする、そこを西井刑事が素早く止めた。
「離せ！」
「離すか！バカ！！」
必死で抑えるが四賀は西井のふくらはぎを肘で攻撃し振り払う。
「死ねぇ！モグラァァァァァァァ！！」

グガァァァァァァァァァァァァァァ！！

プス

四賀の首の後ろに何かが刺さる、針のような物だ。
「ふあ…」

四賀は気が抜けたような声を出す。
「はへえぇぇぇぇ…」
四賀はいきなりフラフラと倒れてしまった、眠ってしまったようだ。
「あれ？寝た！？」
「何で！？」
四賀に刺さったのはコナンが右手に装着している『腕時計型麻酔銃』で撃った麻酔針である、それで眠ってしまったのだ。
「まぁいいわ…逮捕！」
西井は今度こそ四賀の両手に手錠をかける。
「これで四賀は死なんですむわ…」
西井はフゥッと安心する。
「連れてけ。」
西井刑事の命令で山梨県警の警察官が四賀を外へと連れていく。
「後は巨大モグラだね…」
コナンはそう言うと。

グッガァァァァァァ！！

洞窟の奥から鳴き声がした、巨大モグラだ。
「ん？この奥やな！…わかってたけど言ってみたかった…」
西井刑事ら山梨県警は拳銃を、自衛隊は機関銃を手に取る。
……

「あれ？来ない？」
人間を食べにこちらに来るのかと思っていたが巨大モグラは現れない。
「おっかしいなぁ、もしやモグラの奴逃げたか？」
西井刑事は県警と自衛隊を止めておき奥の方の様子を見に行く。その時コナンも見に行っている。

その時だった……

ボッコオォォォォォォォォォォォォォォォン！！

コナン、西井刑事と山梨県警、自衛隊、服部らの間の横の壁が突如崩壊した。
「どえぇぇぇぇぇ！？」
「何だ！？」

ゴアァァァァァァァ！！

崩壊したのは巨大モグラの仕業だ、横の穴を掘ってコナン達の前に現れた。

ガラガラガラガラガラ！！

今の壁の崩壊により地盤が崩れた。
「あ！！」
「しまった！！」
今の地盤崩れで西井刑事とコナンが山梨県警らと離れ離れになってしまった。
「しもおた！地盤沈下が起きるなんて！！」
「服部達とはなれちまった！」
「そや、服部達と…え？呼び捨て？子供が？」
「服部！聞こえるか！服部ぃ！」
何で…あんな子供が…
高二の男子を呼び捨て…
さん付けせずの…
西井はどうしてなのかわからなかった。

ゴヴァァァァァァァ！！

巨大モグラの鳴き声が聞こえる、コナンと西井刑事側の穴からだ。
「うげ！あっしらを食べに来る気か！？」
「おい！服部！」
西井刑事はコナンをムリヤリ抱える。
「え！？何をするんだ！」
「逃げるんや！！こんな所でグズグズしてたらモグラのごちそうになるさかい！こっから離れるんや！！」
西井刑事はコナンを抱えて走り出す。コナンの問いも聞かずに。

服部　山梨県警　自衛隊側

「おい！工藤！聞こえるか！おい！」
服部もさっきのコナンと同様大声をあげて話しかけていた。
「これは開けれないな…」
警官は崩れ落ちた地盤を触って確かめる。
「おい！他にモグラが掘った穴はないんか！？このままやと…」
コナンと西井刑事は巨大モグラに食べられてしまう。

洞窟内

「ハァ…ハァ…ハァ…ハァ…ハァ…ハァ…」
西井刑事はコナンを抱えて走っていたのか疲れてヘトヘトのようだ。
「ハァ…ハァ…ハァ…ハァ…疲れたぁぁ…」
西井はその場で止まりコナンを降ろして休む。
「大丈夫？刑事さん？」
「大丈夫じゃい…心配無用だん…ちょいとは…」
西井は息をきらしている。
「刑事さん、何かなまりが変だよ…」
「それは言うでねぇげ…」

洞窟　外

服部達はいったん外に出て外で待機していた他の山梨県警、自衛隊、研究員達、小五郎達に地盤が崩れた事を知らせ、他の入口の捜索もしくは崩れた地盤から新しい穴を開けるかをしている。ちなみに四賀は山梨県警の本署に連衡された。
「早くしろ！中に子供と西井刑事が取り残されているんだ！」
急いで掘っていく自衛隊。

山の裏側

別の洞窟を捜索している山梨県警。中には蘭や服部もいた。
「早く救出せなぁ！」
「コナン君が…危ない！」
蘭はコナンの事がとても心配になっている。

洞窟　奥

奥深くまで逃げてきたコナンと西井刑事はあちこち見回して出口を探す。
「ハァ…ハァ…ダメか…ここも…」
「出口がない…あのモグラはあの穴からしか出ていないのか…」
「かもしれん…モグラは警戒心が強い…そうやたらに地上に顔を出さん…エサは土の中のミミズとかの虫やからの…」
「刑事さん、詳しいね…」
「元々は農大で勉強してたからな…」
そう話しをしている、その時だった…

ボコォォォォォォォォ！！

すぐそこから土がすごい勢いで噴出した、これはもしかしたら…

グォォォォォォォォォ！！

巨大モグラが掘って出てきたからだ。

「やびぃ！！」

「逃げるぞ！！」

「おう！…何でえらそうやねん！おまえの口調！」

コナンと西井刑事は逃げ出す、巨大モグラは二人を追いかける。巨大モグラには土の中にいた二人は自分のエサだと思っている。

「…たく！」

西井刑事は第一にコナンの命を守ろうと思っている。西井は内ポケットから拳銃を取り出す。

バキュンッ！

バキュンッ！

西井は拳銃を放ち巨大モグラを攻撃する。

ゴガァァァァァァァ！！

巨大モグラは痛がっているのかどうかわからないが、暴れだした。
「クソ！効いてないんか、ありゃぁ！？」
巨大モグラは西井刑事に向かってひっかきに来た。
「うわ！あっしを集中的に攻撃してきやがった！」
西井刑事はコナンに当たらないようにちょっと離れてよけて逃げている。
「アンタばかり狙われて気の毒だな…」
「やかましいわ！」
口ゲンカしながら逃げてる二人。

グガァァァァァァァ！！

巨大モグラは西井ではなく今度はコナンを攻撃する。
「んのこなくそ！！」

ズバァァァァァン！

西井はコナンをかばい左肩を負傷する。

「あ！！」

「痛てぇ…」

洞窟　地盤沈下場所

「早く！早く！」
今急いで掘っている自衛隊と山梨県警ら。

グラァァァァァァァ！！

巨大モグラの鳴き声がここまで聞こえてきた。
「おい…この鳴き声…」
「あのデカモグラの鳴き声だ！二人が危ない！」
「早く救出せねば！！」
自衛隊らはもっと早く、もっと力強く掘り出す。

裏山

山梨県警らと服部達は別の洞窟を探している。
「どこにもない…」
「早せな！く…こ…コナン君…がモグラに食われてまう！」
服部は少々あせっている。

洞窟前

『巨大モグラ対策本部』と書かれたテントの下で美月は西井の無事を祈る。

神様…

お願いします…

しーちゃんを…

助けてください…

美月だけでなく晶菜、木之本、宮藤も心配して無事を祈っている。

洞窟内

負傷した西井刑事はコナンとともに巨大モグラを振り切り、逃げて来た。

「ハァ…ハァ…ハァ…ハァ…痛ぇ…」

西井刑事の左肩から大量の血があふれ出ていた。

「大丈夫か？刑事さん…」

「心配無用…と言いたいがそれは無理だな…」

西井刑事は応急処置で止血した、ヨタヨタと歩く程度なら移動でき

る。
「そうカッコつけるな、とりあえず出よう…」
「……せやな…」

ボーッとしてきたわ…

もう時期『アウト』かな…

西井刑事は意識がうすれてきたのか。
「ここは…」
コナンと西井刑事がたどり着いたのは行き止まり、イヤ、先ほど地盤沈下が起きた場所だ、さっきの入口に戻ってきてしまったのだ。
「なんや、1番最初に戻って来とるやん…」
「ここは行き止まりに決まってる…引き返そう…」

ガッ　ガッ　ガッ　ガッ　ガッ

「ちょい待ち…」
西井はコナンを止める。
「え？」
「…穴掘ってる音や…掘ってる音が聞こえる…」
西井は行き止まりの壁から穴を掘っている音が聞こえると言い出す。
「穴を…」
「もしかしたら…助かるかもな……ハァ…」
西井刑事はさっきから弱ってきている。少しガクッとした。
「大丈夫か！？」
「あぁ単なる出血多量や…肉とか何か食えば治る…」
「どんな医療だよ！」

コナンはこんな状況でツッコミをいれた。

ボコッ！

小さい穴だが土の壁に穴が開いた。

「おぉ…穴が開いたか…」

「大丈夫ですか！？」

穴からのぞき見る自衛隊員、西井刑事は。

「おぉ…大丈夫やさかい…早う助きてぃくりや…」

と答える。

「もっと掘って！刑事さんが出れない！」

とコナンは指示する。

「あぁ、わかった！」

自衛隊員達は急いで周りの土を急いで退ける。

「もうすぐで助かるよ、刑事さん！」

「あぁ…そうやな…巨大モグラが…来なければの話やけど…」

西井は縁起の悪い事を言うが、それは的中した。

グガァァァァァァァ！！

巨大モグラがコナン達のにおいを追ってやって来た。コナン達が危ない。

「あ！来た！！」

「クソォ…」

「まずいぞ！！早く掘れ！掘るんだ！！」

自衛隊員達が急いで土を掘るが、これでは間に合わない。

どうやら…

もうアカンようやな…

何とか…

コナンだけは…

『未来ある子供』だけは…

助けたらな…

ん？…あれは…

西井の眼に入った物、それは先ほど四賀が巨大モグラを倒すために使おうとしていたがコナンによって止められそこに置きっぱなしとなっていた『ダイナマイト』であった。

これしかないか…

西井は立ち上がりコナンの肩をポンと叩く。

「何？」
「さっき、あっしが昔見てた映画『ペギラ』の話しをしたやろ…」
「それがどうした！！そんな話してる場合じゃないだろ！！」
「あれには二作目があってな、二作目はなペギラが南極から日本の東京に行って東京を氷河期にしてもおたんよ、ありゃぁすごかったでぇ…東京が白一色の銀世界になっちまったんやからな…」
西井は巨大モグラが迫って来るのを気にせずコナンに話す。
「やけどな、ペギラは『ペギミンH』というコケから採れる薬が苦手でな、それがあればペギラはすぐさま逃げて行くんや…」
「だ～か～ら～早く逃げるぞって！」

ガシッ

西井はコナンの服をつかみ持ち上げる。
「そのペギミンHが保管されている日本アルプスの極地植物研究所からセスナに乗せて運ぼうとしてた航空会社があったんやけど運悪く宝石強盗の『沢村照男』に脅されて身動きが取れんくなってた…やけど、寒い中航空会社に日本アルプスまで飛んでくれと頼みに来た少年がいたんよ、それは沢村照男の息子『治男』やった、照男を息子の勇敢な行動を知ると自らセスナを操縦して研究所まで飛び、爆薬入りのペギミンHを北アルプスから東京まで運んだんや…」
「だから、その話がいったいどういう意味が！？」
コナンはぶら下がったまま暴れる。
「その後、照男はセスナごとペギラに突っ込んだんや…自分の命と引き替えに…ペギラを撃退したんや…あれは涙無しにはできん…」
西井はしみじみと話す。
「それがどういう…」
コナンは今の話をなぜしたのか、意味が何なのか、それを今理解した。
「それがどういう…」

コナンの眼に『ダイナマイト』が入った時に今の話を何故したのか、意味は何なのか、それを今理解した。
「アンタ…まさか…」
コナンは声は震えている。
「スマンが…伝言を言づかってくれへんか？…」
西井は穴までコナンを運び伝言を伝える。
「木之本貴也には『ゲームでもう一度遊びたかった』、奥平晶菜には『かわいいんやから早彼氏作りぃや』、梶田警部には『良くしてくれて感謝してます』、宮藤さんには『今の今までお世話になりました』、そして、奥平美月には…」
西井はコナンを穴の外にムリヤリ出してから『最後の言葉』を伝える。

「『愛してました』と…」

コナンは洞窟の外に出した、西井は拳銃で一発放ち土を崩す。誰も入って来ないように。
「さてとぅ…」
西井はダイナマイトを箱の中から取り出し身体に装着する。
「さぁてとぅ…あっしの最後の花火大会を始めるとしますか…」

ゴガァァァァァァァ！！

巨大モグラが西井の視界に入った。
「観客も来たしな…」
西井はダイナマイトのスイッチを入れる、時限式だ。

「あっしの好きなヒーローに自爆技ってあったなぁ…いっちょ言ったるか…」
西井は走る準備をし、息を吸い、大声を上げる。

「ウルトラダイナマイトォォォォォォォォォォォォ！！」

大声を上げたと同時に走り出した西井、ダイナマイトを身につけて、巨大モグラに向かって、走り出す。

ドカァァァァァァァァァァァァァァァァァァァン！！

洞窟前の外

コナンは無事救出され、コナンから西井がダイナマイトを使って巨大モグラ共々自爆した事をみんなは知らされる。
「そんな、しーちゃん！」
美月は洞窟に走り出すが、宮藤や木之本、晶菜に止められる。
「まて！美月！」
「離してください！しーちゃんが！」
「君まで死ぬ気か！？」
「でも、しーちゃんが！」

グガガァァァァァァァ！！

巨大モグラが穴から出てきた、顔には無数のキズがあり痛がり苦しんでいる。西井のダイナマイトが効いたようだ。

グア！　グア！　グガァ！

巨大モグラはしばらく苦しみ暴れた後、地中へと逃げて行った。
「逃げた…」
「また出てくるのかな？」
和葉と園子は心配する。
「イヤ、出て来ない…」
と、断言する木村博士。
「どうしてですか？」
蘭が問いかける、その時。

ドッカァァァァァァァァァァァァァァァァァン！！

いきなり百キロ先の休火山が噴火した。
「え！？噴火！？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

地震も起きた、天変地異の始まりか。
「な！？地震まで！」
うろたえる皆々、わけを話す木村博士。
「あの巨大モグラは西井君のダイナマイトの攻撃によって地中深く潜って行ったんだ、そしてこの村は富士火山地帯に入っている、巨大モグラは地中深く潜った時マグマ層に衝突したんだよ。」
巨大モグラはマグマにぶつかり焼け死んだ、村に平和が戻った。だが、美月達にとっては大事な人を犠牲になってしまった。

「しーちゃん…」

美月は大粒の涙を流していた、西井の死を悲しんだ。

しばらくして巨大モグラによる被害は回復していき、この大騒動を起こした犯人『四賀勇樹』は無期懲役が判決された。木村農事研究所はいつも通り農学の研究を続けていた。そのころ美月と晶菜は研究所近くの山中に特別に造られた墓へ墓参りに来ていた。美月と晶菜は線香をたて、菊の花を置き、手を合わせる。
「晶菜…」
「何？お姉ちゃん。」
「しーちゃん、私の事恨んでたのかな…」
「え？」
「私、しーちゃんをフッたんだよ…フッた人間はフラれた人間から恨まれるのは当たり前なんだよ…しーちゃんも私の事…」
「それはないと思うよ…」
「どうして、そう言えるの？」

「だってしーちゃん…優しいもん、フラれたくらいでそう人をキライになる人とは思えないもん…」
「え、でも…」
「しーちゃんは、お姉ちゃんのことを愛してた…だからお姉ちゃんの幸せをいつまでも願ってるんじゃないかな。あの世から…」
晶菜は空を見上げる、もしかしたら西井が見てるかもしれないから。
「しーちゃん…」
西井のことを考えた美月の眼から涙が溢れ出た。

「しーちゃぁぁぁん！！」

美月は空に向かって大声を上げる。

「私ぃぃぃ、ぜったいに！幸せになるからねぇぇぇぇぇぇぇ！！天国から見守っててねぇぇぇぇぇ！！」

美月は天国にいる友達に誓った、必ずやあなたの分まで、幸せになると。

墓標には『西井卓』と書かれていた。西井刑事の墓なのだ。

『嫉妬』…『失恋』…

『悲しみ』…『怒り』…

人の心の中にある『闇』…

『闇』という名の負の感情こそ…

アンバランスゾーンへの入口なのかもしれません…

もしかしたら、あなたの身近に…

イヤ、あなたの心の中に…

アンバランスゾーンの入口があるのかも…

しれません…

気をつけてください…

これで、このお話は…

おしまい…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0388n/

甘い蜜の嫉妬(エンヴィー)

2010年10月13日08時06分発行